（別紙様式）　　（Ａ３判横）

２０２２年度　学 校 自 己 評 価 シ ス テ ム シ ー ト （ 自由の森学園高等学校 ）

目指す学校像	深い知識、豊かな表現、等身大の体験、自立した自由を育む、「観（もののみかた）」の教育
重 点 目 標	１．学んだことを自分の生き方へと結びつけていく「生き方としての進路」づくりのサポートを具体化する ２．自由の森学園の教育実践の特徴である「環境教育」や「国際理解教育」などを多くの学校や団体と連携し、より充実させていく。 ３．地域に開かれた学校づくりを目指すとともに、自由の森学園を地域に広報していく。

達成度			
	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不 十 分	（４割未満）

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	保護者	３　名
	卒業生	２　名
	教職員	３　名

※ 重点目標は３つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目（年度達成目標を意味する。）は複数設定可。
※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学　校　自　己　評　価								学　校　関　係　者　評　価
年　度　目　標					年　度　評　価（　４月３日 現在　）			実施日　令和５年７月２４日
番号	評価項目	現状と課題	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等
1	学んだことを自分の生き方へと結びつけていく、「生き方としての進路」づくりのサポートを具体化する	・「学校から仕事への移行」プロセスが長期化、複雑化、不安定化している中で、卒業後の自分の姿に見通しが持ちにくくなっている。 周りの様々な情報に振り回されるのではなく、日々の学びの積み重ねを通して自分の進路を「生き方の進路」として考え、選びとっていくためのサポートを、これまで以上に具体化・精緻化する。 ・2020年から「大学入試改革」がスタートする。この動向について情報収集とともに学校としての対応、	・進路部、進路プロジェクトを中心に、進路教育に関する学習・研究・情報収集、進路カリキュラムの整備、進路追跡調査などについて検討を進める。 ・担任との個別面談、学年集会での進路ガイダンス、進路講演会、各教科による学習サポートなどを充実させる。 ・学年の教員一人ひとりが適切な進路教育及び進路サポートができるようにしていく。	・進路教育に関する方策を具現化できたか。 ・生徒一人ひとりの進路選択の視野を広げることができたか。 ・教員一人ひとりの力量を高めるために、教員集団としてどのようなことができたのか。	・進路の日「学ぶ・働く・生きる」をテーマとして進路講演会を実施した。 ◇安藤恭子氏（東京新聞記者）伊藤亜紗氏（東京工大教授）渡辺健二氏（元東京芸大教授）など 12 人の講師をお呼びした。 ・進路教育についての研究会に積極的に参加し情報収集をおこなった。 ・引き続き卒業生の進路についての小冊子「もりのあと」を年間4回発行し、さまざまな進路のあり方を紹介した。 ・個別面談は、期間を定め各クラスにおいて実施した。 ・進路ガイダンス等計画を学年会が担当することとし、「仕事に出会う・プロフェッショナルに出会う」といった生徒が自主的に取り組んでいく企画などをおこなった。オンラインなどを活用した。	A	・「進路の日」は定着してきている。この取り組みを今後も発展させていきたい。 ・進路/キャリア教育についての情報収集および研究交流についても積極的におこなうことができた。 各研究会で得た情報について学園内で共有することもある程度できた。より一層の充実が必要である。 ・各教科の進路におけるサポート体制の充実を図る。 ・学年による進路教育や進路サポートをより充実させていく。 ・進路教育の土台となる、授業における成長・発達保障の彫琢。	・自由の森で学校生活を積み重ねてきた生徒たちが、どのような眼差しを獲得し、それをどのように次なる一歩につなげていくかは、重大な問題である。この三年間（六年間）が自身の人生にとって独立した期間となってしまってはならない。それらのことを踏まえ、自由の森ならではの進路プロジェクトが充実してきていることは評価に値する。自身の進路をイメージしていくということを特別なイベントの機会に頼ることなく、日常の営みとしていって欲しい。 ・日々新型コロナウィルスへの緊張感ある対応が継続する中、子どもたちの学びを諦めることなく、貪欲につくりだそうとする姿勢や卒業後の進路に繋げる学びの場づくりに必死さを感じた。 ・一人ひとりの声に寄り添い、子どもの思いを多角的な視点で導く姿に自由の森の「生き方としての進路」を見た。進路を決めていく過程での成長は大変大きく、見えていなかった問題に関心を持つだけにとどまらず、その問題を探求しようと進む姿が生まれる。そこに自由の森での六年間の教育が集約されている。 ・コロナ禍と言われる、行動制限の求められる状況下、「仕事に出会う・プロフェショナルに出会う」は、非常に有効な取り組みとなっていたのではないか。 ・学園を卒業した方達を取材した「もりのあと」は、在校生にこそ活用されるべき充実した内容を具えている。
2	自由の森学園の教育実践の特徴である「環境教育」や「国際理解教育」などを多くの学校や団体と連携し、より充実させていく。	・自由の森学園の開校以来、平和・人権・環境・自然との共生などの現代社会のテーマについて、授業の中でさまざまな活動の中で取り組んできている。 ・選択講座の中にスタディツアーのある講座を増やしていく。 ・こうした実践を校内に留めておくのではなく、同様な実践をおこなっている団体等との連携により、実践をより深めたり広げたりしていく必要がある。	・ユネスコスクールへの加盟により、自由の森学園の実践を、ＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）の枠組みでまとめることにより、国内1000校、海外では1万校のユネスコスクールと連携を進めていく。 ・「自由の森学園はSDGS/ESDとどう向き合っているか」をテーマに公開研究会を行った。	・平和・人権・環境・自然との共生などの現代社会のテーマについて実践を進めてきたか。 ・そうした実践を学校内外に知らせることをおこなってきたか。	・現代社会や理科の各科目においての実践はもとより選択授業において「農業」「林業」「飯能地域研究」「選択自然」「韓国講座」「小岩井生態学」「環境学講座」「タネ」などでもそれぞれのテーマを深めていった。 ・例年行っているスタディツアーとして「日韓高校生交流」「白神山地フィールドワーク」「沖縄西表島フィールドワーク」「木質バイオマス発電フィールドワーク」「東北被災地フィールドワーク」などを実施した。 ・公開研究会では全クラスで授業を公開し、併せて、テーマ別分科会、教科別分科会などをおこない、語り合い、話し合いの場をつくった。ESD分科会を開催し、保護者や学生を交え、意見交換を行った。 ・学校ＨＰにおいてユネスコスクール便りを設け実践を公開している。 ・家庭科においても、持続可能社会をテーマに実践が行われた。使用済み天ぷら油を燃料とした公用車の購入に伴い、生徒の中で、油回収プロジェクトが行われた	B	・選択講座の中にはフィールドワークやスタディツアーなどの体験的な学びは、生徒の学びの深まりや、主体的な学びにつながり、発表や報告の充実につながっていくことが期待される。 ・例年参加していた「アースデー・東京」などといったイベントも参加した ・オンライン講演等の発表の場に積極的に参加し、かつ本校の実践を発信していく。 ・ESDの提携校としてマレーシアの高校とオンラインで交流することを進めていく。	・スタディツアー、フィールドワークの充実が入学動機となっている生徒が少なからずいるのではないか。社会状況との兼ね合いとなるが、生徒たちにとっての選択肢がより一層充実していくことを期待する。 ・バイオマスまきボイラーは地域とのつながりを深めるにあたり、とても魅力的な取り組みとなっているように思うが、それによる不便もあるだろう。特に寮で生活する者に対しては、より深い理解をつくっていく取り組みを重ねていくべきである。
3	地域に開かれた学校づくりを目指すとともに、自由の森学園の教育を積極的に発信する。	・地域との交流・連携は以前に比べかなり進んでおり、自由の森学園に対する地域の理解も深まってきている。 自然豊かなこの飯能という地域との連携をより進めることにより、生徒の学習活動を充実させていく。	・学校説明会や中学校訪問・塾訪問の一層の充実を図る。 ・飯能地域研究では飯能市の小学校との連携の継続。 ・市内の中学への出張授業。 ・地域清掃活動への参加。 ・飯能木質バイオマス協議会に本学園理事長が参加している。	・地域との連携を継続し、より深めることができたか。	・コロナ後、学校説明会や学習塾対象説明会は校舎で開催できるようになった。地域の人などに集まってもらい、交流することなども徐々にできるようになった。 ・例年おこなっている、飯能第二小学校とのさまざまな交流事業は（サマースクールへのボランティア派遣・学園祭への招待など）行った。 ・飯能木質バイオマス協議会では、本学園を含んだ地域内エコシステムの検討が始まっている。	A	・飯能第二小学校との交流事業については多くの地域の方々から高い評価を得てきていただけに、継続が求められる。また、第二区公民館の絵画作成ボランティアも定着している。一層地域との結びつきが強まっている。来年度に向けても発展して継続していきたい。 ・その他の事項についても来年度に向けてより一層の工夫と努力をし、継続していく。	・本学園が飯能という地域とともに成長、発展していくことは必須である。学園の方は、地域との連携より多くのことを学び、地域はこういった学校が飯能において歴史を重ねているということから活力を得ていくべきであると考える。飯能第二小学校との交流事業は、全校生徒や保護者からは見えにくい部分もあるが、是非とも継続して欲しい。 ・近年、自由の森学園が地域の方々に支えられ、求められている様子がよく伝わってくる。とてもいい傾向であるように思うが、社会状況、地域情勢により敏感になり、さらなる連携の可能性を追求していって欲しい。